

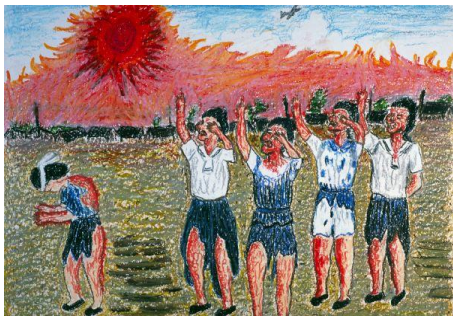
「我が人生思い残すことなし」(前編) きたごう はると 作：北郷 遥斗

※ 前回までのあらすじ ―― 神戸での大空襲の後、きみは子供たちを連れ、戦禍を逃れるため、きみの里である広島の実家に疎開し、身を寄せていた。長男の昭男は1人神戸の家に残り、入隊の機会をうかがい、夫の治一は戦争が始まると、間もなく憲兵に追われる様に身を隠した。そしてある日広島に、「あの日」がやって来た。――

(尚、ホームページでもこれまでのストーリーを見る事が出来ます。www.kyodo-keiei.co.jp)

10. 地獄

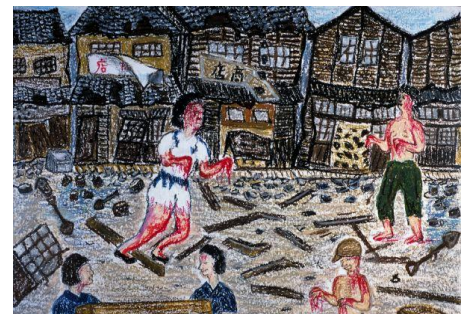
きみは、自治会長の要請に答え、他の隣組の人たちと連れだって、山を降り、広島街に向かった。空は黒く厚い雲に覆われ、夜の様にうす暗かった。その下には、あちこちで火の手が上がり、街を焼き尽くしてる様子が見えた。『これは、とてつもない事が起こっている』と口には出さないが誰もがそう思った。街が近づくと連れ、きな臭いにおいは次第に強くなり、煙で濃い霧の中の様に周りがぼやけて来た。雨は降ってない。4時間程歩き、とうに昼は過ぎていくという



のに、一向に陽は見えぬ、燃える炎だけが身に焼き付けた。「一体どうなってるんだ。」ようやく誰かが口を開いた。と、その時前からぼんやり、人が一人近づいて来た。足元はふらつき、今にも倒れそう。だんだん見えて来ると、どうも女性らしい。髪が腰のあたりまである。ただもうぼさぼさで、ひどくぢぢれているみたいだ。足は裸足だし、服もぼろぼろになって肩から腕からちぎれて垂れ下がっている。

「大丈夫？」きみが抱きかかえ様とした瞬間「ギャー！」思わず悲鳴を上げた。破れた服の姿に見えたのは実は皮膚だったのだ。皮膚がはがれて身体をあちこちから垂れ下がり、それを地面にすれない様に、両手を前突き出す形で歩いているのだ。皆が一斉にその方へ目をやった。と、同時にその女性は、力尽きその場で顔から地面に倒れた。「キャー！」また誰かが声を出した。だがそれは、ほんの始まりでしかなかった。「さあ、先へ急ぎましょう。」きみはようやく我に返り、皆に声をかけた。再び進むに連れ、あちこちの瓦礫の山、家々の燃跡、横たわる真っ黒な遺体、泣き叫ぶ子供、運ばれる負傷者、その光景はどれも目を疑い、この世のものとは思えなかった。

「広島」は人も、木も、街も、何一つ残らず一瞬の内に焼き尽くされ、辺り一面想像を絶する惨状が広がっていた。「悪夢じゃ」「何て恐ろしい」「人間のすることじゃない」「何てことじゃ。広島は地獄になってしまった。」会長はそのまま言葉を失い、呆然と立ち尽くし、宙を見つめた。「水を・・・、水をくれんかのう」そう言い残し誰かがまた倒れた。川にはその水を求めて来た人々が幾重にもなって息絶えていた。



「苦しい!」「助けてくれ!」と、おびたしいうめき声。「目が、目が見えん!」と訴えた少年の眼球は顔から飛び出していた。「負けじゃ。もう日本は負けじゃ。この国は取り返しのかんことになってしまった。「すまん・・・。俺が悪いんじゃけん。」会長は誰とも知れず必死に詫言った。

(つづく)